

III 紹 介 III

日下公人『あと3年で、世界は江戸になる』

澤 喜司郎

(I)

著者は「黒沢明の『七人の侍』は全世界にヒットして衝撃を与えたが、七人の侍がそれぞれに持っていた特技のエピソードやそれから何やら哲学的なセリフは彼がつくったものではなく、日本では昔から語り伝えられてきたものばかりである。それがヒットしたから日本人の心には意外に国際的な普遍性があったのだが、ただしそれは戦闘とか対決とかの物語だった。それは、欧米人がまだ戦国時代の弱肉強食的な社会観や人間観をたくさん持っていることからきた現象である。日本人はそういう戦国時代を卒業し、その後には江戸時代という驚くべき平和な共生社会をつくっているのだが、それについては彼らのほうの理解力が足りない」という。

そして、松尾芭蕉の『奥の細道』をあげて「6カ月、2300キロを歩く間、一度も追いはぎ、スリ、かっぱらい、脅し、ゆすり、それから山賊、テロ、ゲリラ、反乱軍などに会っていない。それどころか、こんなエピソードがある。…農夫は見知らぬ旅人に馬を貸し、芭蕉は礼金を馬に払い、馬は農夫のところまで1頭で帰っていく。こういう牧歌的なエピソードでは、血湧き肉踊る、外国人受けがする映画はつくれない」「しかも日本は人口3000万人という当時は世界最大級の規模でこれだけの平和で安定した国家をつくっていた。そう考えると、世界がこれから平和と共生の時代へと進とすれば、日本はその模範である。また、アメリカ、中国、ロシアが対立して戦国時代へと逆戻りするとすれば、日本に江戸時代をよき先例として世界に教えねばならない。江戸時代およびその前の室町、鎌倉時代から続く日本人がつくった文化・文明は今でも伝統となって私たち一人ひとりの心の中に残っている。それを東洋的とか、近代以前とか、遅れていると言うのは、欧米製の古いメガネで見るからで、そんなメガネは使わないほうがよい。素直に見れば、日本は世界の最先進国である。過去の実績がそうだし、未来を拓く底力においても最先進国である」とし、著者は「日本は『後進国ではなく、先進国だ』というメガネの取り替えを提案する意味であえて(本書を・筆者加筆)発表することにした」としている。

なお、本書の章構成は

序章 エドナイゼーションの始まり

第1章 2010年、世界が江戸になる

第2章 日本繁栄のルーツは江戸にあり

第3章 江戸の生き方がグローバル・スタンダードになる

第4章 ビジネスは江戸に還る

第5章 日本鎖国論

第6章 縦の人間関係復活が日本を強くする

であり、本稿では本書の内容を簡単に紹介したい。

(Ⅱ)

序章「エドナイゼーションの始まり」では、日本は超先端国家であるが、「もっと超先端国は、『江戸』である。江戸時代の日本は、島国の中でいろいろな人が暮らしていた。日本の中に、大名、小名が330人もいた。各藩はそれぞれ独立国だが、同時にみんな一緒の日本人であるという意識を持っていた。つまり、別々でありながら統一もされている。各藩は独立国であるが、天皇や徳川將軍を上にはたたく秩序に服していた。対外的には軍事力がアジアで最強だったときに、自ら鎖国を決め、『侵さず侵されず』を、身をもって実行した。平和と繁栄が長く続く幸福な国の姿を世界史の中に探せば、それは江戸時代といまの日本である。江戸時代にあったもの、および、この50年間、日本が実行しているものには世界的普遍性がある。21世紀の世界は、江戸時代になろうとしている。それが『エドナイゼーション』である」とし、「日本が今後、世界最先端の文化国となるのは2010年からで、「そのときの日本は今の日本ではなく、江戸の文化・文明、ライフスタイルが今以上に生活に浸透しているから、江戸に復古した日本である可能性が高い。つまり、日本が江戸になる」「その江戸に戻った日本に憧れて、日本を目指そうとするから、世界は江戸になっていく」としている。

第1章「2010年、世界が江戸になる」では、「日本の伝統的な文化・文明は1万年の歴史があるが文書が後世に残されるようになってからも聖徳太子以来、約1400年たっている。同じ民族が同じ言語を使って同じ場所で外征戦争も内戦も被侵略もほとんど経験せずに平和裡に磨き上げてきたもので、落ち着いた社会秩序、あるいは精神の持ちようを特徴としている。それが日本人の心である」「江戸時代の日本は、すでに大国であっただけでなく、その首都であった江戸は規模からいっても、文化・

文明の意味合いでも、世界最先端の街だった」ばかりか、「外部からのエネルギーに頼らず、自国内で賄ってしかも世界最高に豊かだった時代がある。それが江戸時代の鎖国である。…他国を蹂躙せず、3000万人の日本人が250年間生き抜いた。社会全体で出生制限を行い、自分たちを抑制してきた。これほど自らを律することができる民族はいない」という。また「日本人には『美意識』がある」「工業製品にも芸術や美意識を求める民族で」、「なぜ工業製品にも美的感覚、質感を求めるのか」というと、おそらく子どもが成長する過程で日本の美しい文化や自然風土が、質や美的感覚を高めるように刺激を与えているからであろう」としている。

第2章「日本繁栄のルーツは江戸にあり」では、日本が世界に誇る大衆文化商品は「最初はオタクのような愛好者だけで好まれていたが、好きな人が増えてやがて産業になり、それが世界にまで輸出されるようになった。こうした文化商品を好きになることは、その背景にある日本の精神を理解するという点で、それは日本人の精神や思想が行き渡っているということでもある。そして日本が優れているのは、いいものを発信して、悪いものを発信しない点である。日本のマンガはその代表例で、思想の面でも西洋文化にない崇高な精神を備え」、「なぜ日本のマンガ、アニメが世界に冠たる芸術作品になりえたか」というと、もともと類似する芸術が長きにわたって続いていたからでもある。その源流をたどっていくと、最上流に国宝『鳥獣人物戯画』がある」とし、「日本人の芸術感覚、美的感覚は、日本のマンガの底流を流れている」という。また「日本文化とは庶民の文化で」、歌舞伎や相撲は「日本を代表する文化になった。庶民の文化がいつしか国の伝統になってしまったのはこの国を支える大衆の力である」としている。

(Ⅲ)

第3章「江戸の生き方がグローバル・スタンダードになる」では、「日本では文化、経済、文明が三つ巴で相反せずに存在してきた。この三つに順番があるとすれば、まず文化が栄える。文化を普及させ、産業化して、量産するのが経済で、それが進むと、たくさん儲けて貯金ができるから、そのお金で社会資本をつくり、学校を創立して、文明秩序ができていく。そして余暇ができると文化の花が咲く。文化→経済→文明と一回りし、停滞すると、また文化から始まる。スタートは文化にある。日本人はもっと日本の文化を褒めるべきなのである」とし、「文明とは食料のつくり方から工業、商業、科学、宗教、行政、政治まで含めた、壮大なシステムのことである。いわば共同生活の技術で、道路や鉄道などのハードに加え、制度や習慣な

どのソフトも備わったものである」としている。

また、江戸時代では「社会が成熟する一方で、大きな内乱や戦争がまったくない状態が長く続いたのだから、文化が発展するのも当然である。江戸文化は、世界各国に比べても、非常に個性的だった。琳派、浮世絵、読み本、絵草子などの独特な成果を持っていた。すでに高度な大衆文化も成立していて、知識人は中国文化崇拝だったために大衆文化を低く見ていたが、江戸が終わってみれば、大衆文化こそが世界に貢献する本当の日本文化であることが明らかになった」「日本は江戸時代に還っていく。というより、これからは世界中が『江戸に学べ』になっていくはずである」という。

第4章「ビジネスは江戸に還る」では、「住友家の家訓には『浮利を追わず』と書いてある。住友家自身が、浮利を追ったか追わなかったかはここでは問題にしないが、それは住友家だけの家訓ではなく、日本の社会全体に通じる家訓でもある。浮利を追わなかった会社はちゃんと残っていて、追った会社はなくなるというだけのことである」が、「『浮利とは何か』を究明した経済学はない。それは心理学や社会学や政治学や倫理学にお任せになっている。そんな経済学は非人間的で、だからこそ『理論経済学』とか『数量経済学』とかの名称で普及したが、その時代はもう終わった。そこで人々が求めるのは『人間経済学』だが、そのヒントは江戸時代の家訓にある」とし、「江戸の商人たちの商売の基本は当意即妙、臨機応変だった」という。そして「なにごとにも臨機応変に、お客が喜ぶように気を利かさないとビジネスは成功しない。いつの時代でも臨機応変にお客との上手な付き合いをすることが成功の秘訣である」としている。

(Ⅳ)

第5章「日本鎖国論」では、「日本人の倫理感を突き詰めていくと、そこにあるのは『そんな汚いことなんかできない』という美的感覚であり、芸術感覚である。こうした美的感覚や芸術感覚を持たず、何でも理論とお金に換算して考えることしかできないのが近ごろのアメリカ人で、それに染まった人が権力を握ったのは不幸なことだった。しかし、大蔵省の人たちはさらに倫理観がなかったのだから、『以夷制夷』と思えば改革はよいことだった。こんなアメリカかぶれの日本人が跋扈して、アメリカの要求に唯々諾々と従ってお先棒担ぎするのを見ると、いっそのこと鎖国したほうがいいのではないかと考えたくもなる。日本が好きで、日本人がつくるものは素晴らしい、ぜひ欲しいと言ってくる国には長崎の出島のような場所をつくっ

て、そこで交易して、日本を悪しざまに言う国や日本をむさぼり尽くそうという国は一切相手にしない。そのほうが日本国および日本人のためになるのではないか。そういう意味で日本が管理貿易をするのは大歓迎である」という。

また「250年間にもわたる長い間、日本が鎖国を続けたのは、そもそも外国と交流する必要がなかったからである。生活に必要なものはすべて日本国内にあって、文化水準・教育水準も世界最高峰であったから、諸外国と交易する必要がなかった」 「徳川幕府は国内の平和と統一のため、外国思想——特にキリスト教伝布者や植民地主義者や個人主義者は、国外追放かまたは帰国禁止にしていたが、それが江戸時代の鎖国であった。日本列島の上で1億人が暮らしていくには、仲間意識を持って日本人同士で仲良くやっていくのが一番いいという考えである。富国強兵政策はそのためのもので、侵略のためではなかった」としている。

第6章「縦の人間関係復活が日本を強くする」では、「エドナイゼーションとは、量から質への転換も意味している。質を高めるには、縦の人間関係が重要である」 「江戸の日本人に学ぶべきは縦の人間関係である」とし、「縦の人間関係が切れたのはたぶん日本社会がアメリカナイズされたため、それから民主主義が発達したということである」という。そして「これからの経済は風流経済であり、風流経済はシニア世代がリードする」 「風流という言葉には裏の意味があって、それは、社会を離れ、社会を超えてなお、何となく自分が満足するということである」 「日本の場合は自分で生きようと決めた瞬間から、風流に生きられる」 「風流生活は、室町時代や江戸時代からある日本の伝統的価値観に即した生き方だから、非常に心地いいものである」 「シニア世代にこれから待っているのは、そういった風流の世界であって、そこからエドナイゼーションが始まる。そして、マンガやアニメ、寿司や歌舞伎や日本語が世界に広がっていったように、風流な生き方も世界に広がっていく」としている。

最後に「世界が江戸になれば、戦争はなくなるし、共同体意識を持った人たちが街にあふれ、江戸時代の町民の暮らしのように、活気あふれた安心で安全な世界がやってくる。そんな世の中が21世紀の世界にもうすぐそこまで来ている」 「世界がこれから江戸時代に学ぶべきことはたくさんあって書ききれないが、問題提起として二つだけあげると、それは、『自分で働く』精神と、『感謝して学ぶ』精神の徹底と普及である」とし、「自分で働く」については「世界の国々や民族はいまだに皆殺しや奴隷化を含む支配によって自らの幸福と繁栄を実現しようとしているが、日本人は『自分が働く』ことによって生活の向上と精神の安定を得ようとしている」

という。

(Ⅳ)

本書には「新『風流』経済学」というサブタイトル(?)がつけられ、「『粹』はこれまでの経済学では測ることができない。これからの経済学は『消費者経済学』であり、『風流経済学』であり、その原点は江戸にある」という著者の主張には賛同するが、「フリーター、ニートは粹な風流人」という主張には疑問を感じる。また「江戸時代と現在の日本ほど平和と繁栄が続いている国はない。これを見て世界の国々は日本化を学ぶようになると考えるのは日本的で、外国には外国のやり方があるから簡単にそうはならない。日本を叱りつけて富を捲き上げようとする。そこでヨーロッパは孤立しても何とか暮らせるようにEUを着々とつくっている。日本は日本主導の『第二国連をつくれ』とはかねてから主張しているところだが、中国を恐れて参加する国が出てこないなら、日本一国で孤立すればいい。これこそ名誉ある孤立で、それは早い話が『鎖国をしる』である」という著者の主張には基本的には同感だが、「名誉ある孤立」と「鎖国」は別問題のような気がする。

以上、本稿では本書の内容を簡単に紹介してきたが、浅学非才な筆者には的確な紹介ができず、また筆者の不勉強による誤読の可能性もあり、この点については著者のご海容をお願いする次第である。

(ビジネス社、2007年11月、205頁、定価1,400円+税)